

朱熹『朱文公文集』跋文訳注稿（二）

市來 津由彦

はじめに

本稿は、朱熹（一一三〇—一二〇〇）『晦庵先生朱文公文集』巻八一〜八四「跋」に対する訳注の試みの連載第二回目である。当面は巻八一部分の全訳の完成をめざす。

「跋」文の記述構造と読まれ方のしくみ、跋文の資料としての意味や、朱熹思想研究にとつての意義については、連載第一回目『東洋古典学研究』第二〇集、二〇〇五年の「はじめに」において説明した。また、現代日本語翻訳文、原文、漢文訓読書き下し文、語注、補説などの本訳注の記述方針などについても、同所で示した。

今回は、朱熹四十歳のいわゆる「定論」定立に至る過程に関わる思想彷徨期のものを収める。

以下、連載第一回目に提示したものであるが、主要な使用資料および注解のための参考文献リストを掲げておく。

【資料と略称】

※基本資料

- ・『晦庵先生朱文公文集』（嘉靖二十一年重刊影印、四部叢刊集部）
- ・『朱子大全』（二七七〇年刊影印。保景文化社、一九八四年）
- ・『李朝本』
- ・『晦庵先生朱文公文集』（江戸・正徳十一年刊本影印。
 - 中文出版社和刻影印近世漢籍叢刊思想編）
 - …『和刻本』
- ・『朱熹集』（校点本。四川教育出版社、一九九四年）
- …『朱熹集』
- ・『晦庵先生文集』（四部叢刊三編）
- …『宋本朱熹集』
- ・朱熹生前に刊されたと思われる文集。巻九に題跋十五点を含む。
- ・『朱子語類』（校点本。中華書局、一九八六年）
- …『語類』
- ・『宋史』（校点本、中華書局、一九七七年）
- …『宋史』
- ・『宋元学案』（校点本、中華書局、一九八六年）
- …『学案』
- ・『宋元学案補遺』（世界書局、一九六六年）
- …『学案』補遺
- ・『統資治通鑑長編』（世界書局、一九六一年）
- …『長編』

・『建炎以来繫年要録』（校点本。中華書局、一九八六年）

…『繫年要録』

※文集の注釈参考書

・『朱子大全筭疑輯補』

（二六一〇年李埈序影印。韓國學資料院、一九八五年）

* 李朝鮮時代の『朱集』に対する注釈『朱子大全筭疑』以下の

一連の注釈を集めたもの。一七世紀以降のものであるので、資料の検

討範囲は現代とさほど変わらないが、些細な箇所未詳の事にヒ

ントが得られてたいへん有用。その価値と意義については、三浦

國雄「朱子大全筭疑をめぐって―朝鮮朱子学の側面―」（森三樹

三郎博士頌寿記念東洋学論集』朋友書店、一九七九年）、参照。以

下のものが収録されている。

・『朱子書節要記疑』李滉

・『朱子大全筭疑』宋時烈

・『朱子大全筭疑問目』金昌協

・『朱子大全筭疑問目標補』金邁淳

・『朱子大全筭疑問目標補』金邁淳從兄

・『朱子大全筭疑節補』任鹿門

…『朱子記疑』

…『朱子筭疑』

…『朱子問目』

…『朱子標補』

…『朱子管補』

…『朱子節補』

※近年刊行の参考書

・高令印『朱熹事迹考』（上海人民出版社、一九八七年）

…高氏『事迹考』

・陳来『朱子書信編年考証』（上海人民出版社、一九八九年）

…陳氏『書信考証』

・束景南『朱熹年譜長編』（華東師範大学出版社、二〇〇一年）

…束氏『年譜長編』

・束景南『朱熹佚文輯考』（江蘇古籍出版社、一九九二年）

…束氏『佚文輯考』

・束景南『朱子大伝』（福建教育出版社、一九九二年）

…束氏『大伝』

・陳榮捷『朱子門人』（台湾學生書局、一九八二年）

…陳氏『門人』

・陳榮捷『朱子新探索』（台湾學生書局、一九八八年）

…陳氏『新探索』

・郭齊『朱熹詩詞編年箋注』（巴蜀書社、二〇〇〇年）

…郭氏『詩詞箋注』

・宋元文学研究会編『朱子絶句全訳注』第一〜三冊

（汲古書院、一九九一年）。刊行継続中…『絶句訳注』

『朱文公文集』卷八十一「跋」―続き―

3 胡(安国) 文定公の詩に跋する

天地生殺の機鋒を手に握り
一瞬一瞬に自在にはたらかせる
堂いっばいに集まつた兔や馬は龍のごとき象ではなく
大いなるはたらきは雄大で 誰も捉えようもない

江南の春の苔むす寺を 「あなたは」あまねく歩きまわられた

山野に湧く雲のたなびく姿が 行ったり来たり

ひとつ抜きんでた峰の頂きに今やどつしりすわられ

伝えることができる教えもなく 心おのずと寂まっておられる

祝融峰は城市の天にそびえるよう

万古からの江の流れと山々は 目前にある

死心和尚の教えが「死といいながら」もと死せざるものなのは

夜のかがやく月が 「かわらず」また円まあるくなっている
必ずやまことのこと

あなたは若いときから人々にすぐれ

佳き詩句は世に広がり伝わり

遠く離れた澄みわたる空をつないでいる
聞いております お別れして後まよいのころが寂まられたと

つまりはどういう教えによって魔軍まぐんを退けられたのか

十年ものあいだ音さを断たれておられた

雲水生活をし世俗の頂を超えた人を夢に想っておりました

香飯はご自分ではひさしく満腹ではありませんようが

やはりあまたの身に分けて 多くの人々を濟つてくださるはず

右は胡(安国) 文定公が僧に応えた五つの詩である。公の子の「胡寅」侍郎が書きつけて墓守の僧である妙観に授けたもので、妙観がその筆跡どおりに刻んだものである。

儒学と仏学との間には、おもうにいわゆる毛すじほどの「後には大きくなっていくはじまりの」ちがいが『史記』太史公自序」というものがある。この詩を読む者は、このちがいを区別することができれば、言ヲ知ル(言葉を通して道理がわかる)『孟子』公孫丑上篇)ことにせまるであろう。

乾道(元年)乙酉の年(一一六五)十一月庚午(新曆二月二九日)、新安(出身の)のわたくし朱熹が書きつける。

跋胡文定公(①) 詩

手握乾坤殺活機、縦横施設在臨時、満堂兔馬非龍象、大用堂堂総不知(②)。

踏遍江南春時苔、野雲蹤跡去還來。如今宴坐孤峰頂、無法可伝心自灰(③)。

祝融峰似在城天、万古江山在目前、須信死心元不死、夜來明

月又重円(④)。

明公從小便超群、佳句流伝繼碧雲。聞道別來諸念息。定將何法退魔軍(⑤)。

十年音信断鴻鱗、夢想雲居頂上人。香飯可能長自飽、也応分濟百千身(⑥)。

右胡文定公答僧五詩(⑦)。公子侍郎(⑧)所書以授墳僧妙觀(⑨)、而妙觀所摹刻也。儒釈之間、蓋有所謂毫釐之差者。読之者能辨之、則庶乎知言矣。乾道乙酉十一月庚午、新安朱熹書。

胡文定公の詩に跋す

手に握る乾坤殺活の機、縦横に施設して臨時に在り、満堂の兎馬は龍象に非ず、大用堂堂として総て知らず。

踏遍す江南の春寺の苔、野雲の蹤跡 去きて還た來たる。如今宴坐す孤峰の頂、法の伝ふ可き無くして心 自ら灰す。

祝融峰は城の天に在るが似く、万古の江山は目前に在り、須らく信ずべし死心 元と不死なるを、夜來の明月 又た重ねて円かなり。

明公 小き従り便ち群を超え、佳句流伝して碧雲を繼ぐ。聞道くならく別れてより 來 諸念息む、と。定めて何の法を將て魔軍を退くるや。

十年の音信 鴻鱗を断つ、夢想す雲居頂上の人。香飯 可能く長く自ら飽くも、也た応に分かちて百千の身を濟ふべし。

右は胡文定公 僧に答ふるの五つの詩なり。公の子侍郎 書して以て墳僧の妙觀に授くる所にして、妙觀の摹刻する所なり。儒釈の間、蓋

し所謂る毫釐の差なる者有り。之を読む者能く之を辨せば、則ち言を知るに庶からん。乾道乙酉十一月庚午、新安の朱熹書す。

① 胡文定公 胡安国(一〇七四—一三三八)、字は康侯、建州崇安県籍溪里の人のこと。文定は諡。『宋史』卷四三五、『学案』・同『補遺』卷三四「武夷学案」等。詳細な伝記資料として、胡寅『斐然集』卷二五「先公行状」がある(翻訳として高畑常信『中國人の生き方 第三集』明德出版社、一九九四年がある)。紹聖四年(一〇九七)の進士。道学の定礎者である二程には会ってはいないが、その高弟謝良佐、楊時、游酢らと親しく交流した。新法党政権の北宋末期は出でてでも地方末端の官におり、出処に慎重だった。靖康の変後、王安石の學術批判の潮流の中で起用されて給事中、侍講などになるが、宋金戦争のさ中、まもなく亡くなる。晩年、中原の恢復を強調した『春秋胡氏伝』を著し、この書は朱子学系の春秋学の注釈の代表となった。靖康の変のおりは出先の湖北にいたが、金軍が福建北部まで延びていたので、家族を引き連れ湖南に避難することにし、衡山北麓に居を定めた。嗣子寅、および寧、宏らも道学系の思想家として名をなし、張栻、朱熹らに影響を与えた。その学派を、張栻も含めて、中国では湖湘学派、日本では(胡氏)湖南学と呼んでいる。

② 手握乾坤殺活機、以下、本条の詩には禪仏教に関わる用語も雜じり、遺憾ながら詩語の深いレベルの語注を作成する技量を持たない。周辺のな事情を中心に、一首ごとに全体的にみていく。

南宋末の『五灯会元』卷一八「南岳下十五世 上封秀禪師法

嗣」に「文定胡安国」の項が立てられ、「久しく上封に依りて言外の旨を得。久依上封得言外之旨」とみえ、右の詩の第一首、第三首を収載する。第一首は、「崇寧中に葉山に過ぎる。禪人有り、南泉の猫を斬るの話を挙して公に問ふ。公偈を以て答へて曰く、く。崇寧中過葉山。有禪人、举南泉斬猫話問公。公以偈答曰、く」とある文脈で引かれている。また、『朱集』巻四四「答蔡季通」五に、「胡文定の一書、朱子発の南泉新(斬の誤りならん)『朱子筭疑』猫の話を挙するに答ふるは、集中に之れ有りや否や。胡文定一書、答朱子発举南泉新猫話者、集中有之否」とあるのを見ると、『会元』に言う「禪人」は僧ではなく、朱震(一〇七二—一一三八。易学で有名)、字は子発ということになる。「南泉斬猫」は、『祖堂集』巻五、『景德伝灯録』巻八、『碧巖録』第六三則などにみえる有名な話。ある日、寺で猫のことで僧たちが争っていたのを南泉普願(七四九—八三四)和尚が見て、猫を持ち上げて「悟りに関わる肝心のことが」言うことができれば斬らない」と言ったが、誰も答えなかつたので斬つてしまったという話である。胡安国の同時代の禅門でこの話がどうみられていたかは、『碧巖録』の雪竇重顕(九八〇—一〇五二)の「頌」、円悟克勤(一〇六三—一一三五)の「評唱」を参照のこと(近年の研究を盛り込んだ新訳として、末木文美士編『現代語訳碧巖録』上中下、岩波書店、二〇〇一—三年)があり、門外漢にはきわめて有用である)。

以上の材料を併せ、この「南泉斬猫」の場面を思い浮かべると、本詩は、胡安国が南泉和尚の禅的力量を称えた詩と推定で

きる。その文脈からすると、「兔馬」はわからない修行僧たち、「龍象」は南泉と同じくすぐれた力量の僧を指す。なお『朱子筭疑』は「兔馬」「龍象」の仏典上の事例を示すが、省略に従う。

③ 踏遍江南春時苦く 本第二首詩の「如今宴坐す孤峰の頂」と第三首詩の「祝融峰」とが呼応し、第二首の詩以下の四首をセツトにして、旧知の僧が修行を終えて、衡山祝融峰にゆかりの寺に帰ってきた、と読むことができる。「法の伝ふ可き亡く心自ら灰す」は、何もわかっていないということではもとよりなく、まよいが絶たれた境地としての真理は、客観化対象化して操作的に捉えたり説明したりできるようなものとしてあるのではないということを示しつつ、かつそうした意味の真理を今や体得していることを称えた表現である。

④ 祝融峰似在城天く 注②所掲の『五灯会元』の「文定胡安国」の項の続きに、「又上封に寄せて、くと曰へる有り。有曰又寄上封有曰く」とあって本詩を引く。「祝融峰似在城天」は「祝融峰似杜城天」に、「夜来明月又重圓」は「夜来秋月又同圓」に作る。大意は同じ。この『五灯会元』で胡安国の先生と系譜づけられている「上封秀禪師」は、同じく『会元』巻一八の「南岳下十四世 黄龍新禪師法嗣」にみえる「潭州上封祖秀禪師」か。ただし本条の上封寺は、清『湖広通志』巻八〇や『方輿勝覽』卷二三にみえる衡山県の上封寺であろう。後者には、「上封寺 祝融の絶頂に在り。在祝融之絶頂」とあり、詩の内容に対応する。安国の子宏の『五峯集』巻一「題上封寺」にも上封寺が称えられているが、これもこの衡山祝融峰の寺である。さ

てさらに『会元』の系譜を遡ると、この上封祖秀和尚の先生とされる「黄龍新禪師」とは、同書卷一七「南岳下十三世上 黄龍心禪師法嗣」にみえる「隆興府黄龍死心悟新禪師」のことであろう。詩中の「死心 元と不死なり」の「死心」はこの人を指す固有名詞とみられ、上封祖秀の修行がしっかりしたものであり、かつこの地で法系がこれから続くことと、及びその禅的力量的高さを称える表現と読むことができる。

⑤明公従小便超群く 第四、五首で和尚との再会を歓迎し、これからの期待を述べる。「碧雲」は澄みきつた青い空と雲。遠方の意もあらわす。

⑥十年音信断鴻鱗く 「鴻鱗」は書信、「香飯」は「自飽」からしてここでは直接には僧堂の食事のことを言おうが、維摩が香積仏の世界からもたらして衆僧に供した「香積飯」のこと(『維摩経』香積仏品)を意味的に重ねて、祖秀の教化をも意味しよう。

⑦答僧五詩 注②、④により、「僧」はここでは上封祖秀とみたが、第一首詩はその祖秀のために作ったものではなく、別に作られたものであろう。胡寅がこれらを合わせ、祖秀を称えるものに転化したか。胡安国『武夷集』が亡びているので、これ以上は詰めがたい。なお、ここでは『五灯会元』の「文定胡安国」の項から本跋文の詩を解釈したが、事実的経緯としては、本跋文で胡寅が合わせたものとして五つの詩が並ぶことから、『五灯会元』の記述が成立したとみるべきか。

⑧公子侍郎 胡寅(一〇九八—一一五六)、字は明仲のこと。号は致堂。胡安国の弟の子。安国の嗣子となる。「侍郎」は、南宋初

の宋金戦争の状況の中、父の後を受けて拔擢されて、礼部侍郎・侍講・直学士院となったための呼称(紹興八一—一三八年)。「宋史」卷四三五、「学案」・同「補遺」卷四一「衡麓学案」等。宣和三年(一一二二)の進士。右のように南宋初に一時拔擢されたが、その後、宋金講話政策をとる秦檜政権時代は排除された。父の思想を受け継ぎ、華夷の辨を唱える。著に『崇正辨』『読史管見』文集『斐然集』が存する。

⑨填僧妙観 朱熹の解説に拠って、五つの詩を胡寅が合わせて授けた相手だとすると、この「填僧」妙観は、胡安国の墓に関わる僧か。禅門系の伝記資料では未詳。胡安国の墓は、「潭州湘潭県龍穴山」(『斐然集』卷二五「先公行状」)、湘江と漣水が合流する潭州湘潭県の、その合流地点近く南にやはり衡山北麓から流れ込む涓水の碧泉村をやや入ったところにあるとのことである。高畑常信『宋代湖南学の研究』(秋山書店、一九九七年)四四頁地図、参照。同書口絵に墓の現姿の写真が収載されている。

【補説】 本条のもとになる作品は、胡寅の筆のおそらく拓本として朱熹の目の前にある。しかし見せた者との機縁は書かれていない。妙観を称揚するのであれば妙観がもたらしたとも考えられるが、そうとはみえない。乾道元年十一月という時点と、そのとき朱熹はおそらく崇安にいたであろうことを考えると、湖南に移った胡安国に対して、崇安に残った胡氏一族のうちの、朱熹の若きときの儒学の三先生の一人となっていた胡憲(後述第5条注参照)に関わるルートを通して見せてもらったのではない

いか。本跋文は、「毫釐の差」を持ち出す朱熹が、上封祖秀を称える胡安国のその称え方に対し、批判的意識を持って書いていると読める。それは、この乾道元年の時点で関心を大いに持っている張栻の師筋の、かつ華夷の辨を唱える胡安国が仏教にかなり傾倒しているというおどろきによるものか。あるいは僧に距離を置かず密着したこうした仏教傾倒では仏教に取り込まれるだけなので、内容的にもっと深いところから儒学を構築せねばならないという意識からのものであろうか。ともあれ、褒めるニュアンスが跋文中にないところに、拝読の機縁に氣遣いしなくてよい関係ゆえの表現ということが、逆に推測できる。

本条で、朱熹の評から離れてもとの胡安国の詩に即して思想史研究上で興味深いのは、外夷を逐い中原恢復を唱える胡安国が禅仏教に肩入れし、またその周辺にやはり北宋道学の系譜に連なる朱震の名がかいま見えることである。注②の「有禅人」が朱震だとすると、両者は禅仏教の教養があることを誇らしく争うかのようなのである。それは、道学の定楚者、二程が、心を鍛えることにおいて土俵を共有しつつ仏教を克服する視座をもと提起したのに対し、しかし士大夫知識人層の仏教傾倒は時とともに深化していつているという、北宋末士大夫思想界の潮流のあらわれといえる。思想系譜的には二程に連なる胡・朱両者であることが象徴的である。

しかし、その胡安国の仏教傾倒の方向と質も、同時にここにはうかがえる。注②の「南泉斬猫」の話は、『伝灯録』や『無門関』ではもう一つ話が続いており、すなわち、その夜、南泉の

高弟の趙州和尚が帰ってきたので、南泉が昼間のことを話してやると、趙州は草履を脱いで頭に載せて出て行き、それをみて、趙州がいたなら猫は救えたらうと南泉が言った、とのことである。この趙州の不思議な振る舞いには、南泉が「斬るぞ」と問いかけた設定そのものをひっくり返す、あるいは無化する力が感得され、その力こそが、南泉が問いかけたかったものであるうと思われる。ただし本訳注筆者は禅問答には門外漢であり、この切断面と、南泉がみてとった肯いとのつながりを説くことはできない。一方、禅仏教内部におけるこうしたやりとりになると、本跋文収載の詩の第一首は、この話の場面を正直になぞるものとして、説明的でわかりやすい。しかし場面に入っていない。場面を壊すものとして言葉を使っているのではなく、場面そのものは前提としてそのまま認める。その意味では、南泉の問いかけや趙州の振る舞いのエネルギーと、胡安国がこの詩を表現するときの心のありようにはずれがあるように思われ、また、それが仏教に傾く士大夫たちの禅仏教理解の一つのあり方であったかとみられる。そしてかつ、この詩を『五灯会元』に組み入れるということは、この詩が禅仏教の真の理解に到達しているかともあれ、禅仏教側も、士大夫の禅仏教傾倒はこの水準の理解でよしとしていたともいえないか。そうした表現をしてもらえれば、思想家活動に傾く有力士大夫たちがこのように仏教に傾倒している、という宣伝にもなるわけである。

4 張(栻) 敬夫殿が書いた城南書院の詩に跋する

〔張(栻) 敬夫殿の城南〔書院〕の景觀のすばらしさを久しく聞いており、まだそこに行つて楽しむことができないのをいつも残念に思つていた。いまこの詩を読むと、風にゆれる叢竹や水に映る月影が間近にあることをそのまま感じとれる。しかしながら、敬夫殿は道学の立派な人材であつて、現代の純正な儒学者である。なのに今、「この詩を作り」文字文学の技芸によつて前人〔李建中〕の作品を後追いしようとするのは、あるいは戯れであろうか〔道学の心からであろう〕。そうでないならば、敬夫殿の豪快奔放さと、「こうした園林景物詩の手本となる李(建中) 西台(西京洛陽御史台) 氏の温厚で深い静けさとの、どちらがすぐれているかの計量は、区別できる者がかならずやいるであろう。朱仲晦父かくいう。

跋張敬夫(①)所書城南書院(②)詩(③)

久聞敬夫城南景物之勝、常恨未得往遊其間。今讀此詩(④)、便覺風篁水月去人不遠。然敬夫道學之懿、為世醇儒(⑤)。今乃欲以筆札之工追蹤前作、豈其戲耶。不然、則敬夫之豪放奔逸、与西台(⑥)之温厚靚深、其得失之算、必有能辨之者。朱仲晦父(⑦)云。

張敬夫の書する所の城南書院の詩に跋す

久しく敬夫の城南景物の勝を聞く。常に未だ往きて其の間に遊ぶを得ざるを恨む。今ま此の詩を読むに、便ち風篁水月人を去ること遠からざるを覚ゆ。然れども敬夫は道学の懿にして、世の醇儒為り。今ま乃

ち筆札の工を以て前作を追蹤せんと欲するは、豈に其れ戯れならんや。然らざれば、則ち敬夫の豪放奔逸と西台の温厚靚深と、其の得失の算は、必ず能く之を辨する者有らむ。朱仲晦父云ふ。

①張敬夫 張栻(一一三三—一一八〇)の字。もとの字は欽夫。北宋最後の皇帝の諡号を「欽宗」としたことからの字の文字を変えた(一一七〇年頃以降)。号は南軒。『宋史』卷四二九、『学案』同『補遺』卷五〇「南軒学案」等。南宋初期の主戦派高官で、宋金戦争の指導者張浚(一一〇九—一一六四。本訳注後述第6条、参照)の子。いわゆる胡氏湖南学の胡宏(一一〇六—一一六一)に学ぶ。

胡宏については次条の注①、参照。張栻は朱熹とは隆興元年(一一六三)年に初見。本訳注第2条「補説」で述べたように、翌隆興二年の張浚の死去に対し朱熹が弔問した時に朱熹と三日間にわたつて語り合い、それ以後、思想的盟友となり、乾道三年(一一六七)に朱熹は、張栻が住む長沙に訪問旅行をした。はじめは張栻が朱熹に大きく思想的影響を与えたとされる(友枝龍太郎『朱子の思想形成』第一章「意識の問題」、春秋社、一九六九年、改訂第一刷)。

②城南書院 注①の張浚は、宋金戦争の指導をはずされて紹興九年

(一一三九)に知福州となつたが、同一一年に任を解かれ祠録官を得て福州から離れる。しかし出身地の蜀に帰るのは臨安の南宋朝廷から離れすぎることになり、と同時に年老いた母の望郷の思いをも慮り、中途の湖南路潭州長沙に家族で住むこととして、翌年、「長沙城の南」に屋敷を造つた(『朱集』卷九五下「少

師保信軍節度使魏国公致仕贈太保張公行狀)。少年の張栻も一時こ

こに住んだ。その張栻が後に講学施設としてこの地を整え城南書院とした(時期については『補説』参照)。その位置に湖南第一師範学校(毛沢東の母校)が建っている。宋元文学研究会編『朱子絶句全訳注』第三冊(汲古書院、一九九八年。以下、『絶句訳注』第三冊)、七頁以下「張栻と城南書院」(後藤淳一氏担当)、参照。

③城南書院詩 城南書院の風光を詠い朱熹に贈った張栻の連作絶句

詩。『南軒集』巻七「城南雜詠二十首」。詩題は、納湖・東渚・詠帰橋・船斎・麗沢・蘭澗・山斎・書樓・蒙軒・石瀨・卷雲亭・柳堤・月榭・濯清亭・西嶼・琮瑋谷・梅堤・聽雨舫・采菱舟・南阜。これに対し朱熹は連作の酬和詩を作って返した。『朱集』巻三「奉同張敬夫城南二十詠」。その現物か、あるいは後年に自身で書いたものかは不明だが、朱熹の真蹟が今に残る。陳氏『新探索』六九九頁(朱子墨蹟)の項)参照。また日本語訳注が二点ある。高畑常信「張南軒『城南雜詠二十首』朱子『張敬夫の城南二十詠に奉同す』訳注」(『宋代湖南学の研究』所収、一九九五年初出)、および注②所掲『絶句訳注』第三冊。詩の内容についてはこれらを参照されたい。本跋文は、張栻から連作詩を贈られた後、これに対する酬和詩をつくる前に書かれたか。④今読此詩 張栻は二十首の詩を城南書院を描いた画卷とともに贈り(『南軒集』巻二「答朱元晦」其一に、「城南の図并びに小詩を送り去く。送城南図并小詩去」とみえる)、朱熹は画卷を見ながら詩を味わったはずである(朱熹「奉同張敬夫城南二十詠」第一首「納湖」の第一、二句に、「詩筒 画卷を連れ、坐して看復た行きて吟す。

詩筒連画卷、坐看復行吟」とある)。

⑤醇儒 まじりけがない儒学者。張栻が学んだ胡宏の道学は、心の働きの意義を特に重視し鍛える儒学であった。心の働きの尊重

し鍛えるとなると、その課題領域は仏学に接近するが、しかし道学を学ぶからこそ仏学には傾かず、傾かないままに深い表現に到達できているとして、仏学の要素がそこにみられないことを、「醇」と言ったのである。かつそう表現するのは、朱熹自身も同じ構えを共有するということの表明でもあろう。

⑥西台 李建中(九四五—一〇一三)、字は得中のこと。『宋史』巻四

四「文苑」三、『学案補遺』巻六「士劉諸儒学案補遺」等。洛陽が好きで、求めて前後三回、「西京留司御史台」となったことにより(『宋史』本伝等)、「李西台」と呼ばれる。「西京」は洛陽のこと。太平興国八年(九八三)の進士。李が名勝を詩にしたことについては、本伝に、「尤も洛中の風土を愛し、就ち園池を構へ、号して静居と曰ふ。吟詠を好み、山水に遊ぶ毎に、留題多く、自ら巖夫民伯と称す。尤愛洛中風土、就構園池、号曰静居。好吟詠、每遊山水、多留題、自称巖夫民伯」とみえる。本伝の元の資料は不詳。朱熹の本文、「筆札の工」に関わることだが、李建中本伝はまた、「建中書札を善くし、行筆尤も工なり。建中善書札、行筆尤工」と語り、書をよくしたという。李の書風については『宣和書譜』巻二に紹介がみえる。朱熹も李の書を見たことがある(『朱集』巻八二「題西台書」)。

朱熹の本文が言う「温厚靚深」の内容については、本伝に文集三十巻があったと説くが、宋代の書物に関する諸書目にも見

えず、右の「静居」とか、またその前に本伝に「建中性簡静にして、風神雅秀、榮利に恬たり。建中性簡静、風神雅秀、恬於榮利」とかとみえるより以上は、資料的には不詳である（書作品の跋文や詩歌選集、詩話類から、若干の詩を集めることはできる）。よってそれが張栻の「豪放奔逸」と対比される理由も、今からは確かめることが難しい。

⑦仲晦父 朱熹の字の表現の一つ。「仲晦」またそれに「父」「甫」をつけた自称表現が相当数ある。これに対し字の正称である「元晦」を自称表現する例はほとんどない。

【補説】 朱熹の「奉同張敬夫城南二十詠」の作成時期について近年、論議が起きている。『絶句訳注』第三冊、後藤淳一「張栻と城南書院」を参考にしつつ、以下、簡略にふれたい。

すなわち、本跋文には作成月日が書かれておらず、『朱集』の跋文配列はほぼ年次順であることを考えると、本跋文の前の第3条は乾道元年（一一六五）十一月、すぐ後の第5条は日付がないが、第6条は乾道三年一二月の日付が書かれている。その配列からすると、素材にみれば乾道二、三年頃ということになる。申美子『朱子詩中的思想研究』（台北、文史哲出版社、一九八八年）、および注③所掲の高畑常信「張南軒『城南雜詠二十首』朱子『張敬夫の城南二十詠に奉同す』訳注」は、城南書院、岳麓書院、長沙、湖南に関する地方志類を参考資料としつつ、『朱集』のこの配列と、張栻・朱熹の詩を朱熹がまだ長沙訪問をしていないと解説する立場から、乾道三年の長沙訪問以前とする。こ

れに対して郭斉『朱熹新考』（電子科技出版社、一九九四年）が、注④に引いた「送城南園并小詩去」の一句を含む張栻の書簡（『南軒集』卷三二「答朱元晦」其二）の年時考証から、淳熙元年（一一七四）九月からまもなくの頃とみる。この『朱熹新考』は遺憾ながら本訳注筆者は未見。ただし郭氏の新著『朱熹詩詞編年箋注』も同じ説である（上冊二六〇頁）。これらを検討し、郭説をさらに吟味した上で、後藤氏は『南軒集』の朱熹、呂祖謙宛て書簡を吟味して、淳熙元年に連作詩が作られたと結論づけている。さらに、後藤氏の論（一九九八年）よりも後の束氏『年譜長編』（二〇〇一年）も、一連の書簡の考証から、淳熙元年歳末として（巻上、五二〇～五二二頁）。

淳熙元年とする以上の結論は妥当なものと考えられる。跋文の配列だけから年時を推定するときには、慎重さが求められるということになる。そして本跋文は、張栻の詩を受け取ったところで書かれているであろうから、作られたのはこの作詩時期よりも若干前にならう。

では、本跋文が乾道三年以前ではなく淳熙元年に書かれたとしたら、なにか見え方が変わるのか。ここで思い出されるべきは、朱熹と張栻との思想交渉の経緯である。この両者の関係については、はじめ朱熹が張栻の影響を強く受け、その影響から自立することにより朱熹がその独自の思想的立場を確立し、その後は朱熹が張栻に影響を与えたとされる。従来の研究ではその転換点は、乾道五年朱熹四十歳の春とみられている。注①所掲、友枝龍太郎『朱子の思想形成』第一章「意識の問題」、参照。

この過程の中では、乾道三年(一一六七年、朱熹三十八歳)は、朱熹が張栻の思想に共感し、最も接近、吸収しようとしていた時期にあたる。詳論する余裕はないが、その頃の張栻宛て朱熹書簡(『朱集』卷三〇、いわゆる中和旧説にあたるものなど)は、張栻にアプローチする朱熹のきまじめさがあふれているようにみえる。これに対し淳熙元年(一一七四年、朱熹四十五歳)という時点は、朱熹がその独自の思想的立場を固め、そこから旧説とそのもとなつた張栻の思考に検討を加え討論を重ね(『朱集』卷七三「胡子知言疑義」論など)、それが一段落してその説を四書の注解として書き始めていた頃にあたる。張栻との関係でいえば、主観的には張の説の難点を克服するものとしての自説に確信をすでに持っていた時期に当たる。

本跋文の、張栻を「醇儒」としながら「筆札の工」に照明をあてて、それを「豈其戲耶。不然、則」とする文脈のつなぎ方は、屈曲に富んでいささかわかりにくい。「不然」は、道学の視座を欠いた単なる文章技芸ならば(戯れならば)、との意とひとまず取ったが、この屈曲した表現には、張栻との関わりにおいて朱熹の心に余裕と自信のようなものがあるのうかがえる。これは、乾道三年という時点では考えにくいものである。このことは、この城南雜詠の往復がやはり淳熙元年であること、のあらわれではなからうか。

5 胡(宏)五峰殿の詩に跋する

隠れ棲むひとは青々とした山のよさをひたすら愛する

この青き山が青々として老いないためである

山中に雲が出で来て 空いっぱいに雨ふり

ほこりをすっかり洗い流し 山はさらに「青々と」よくなった

右は衡山の胡(宏)先生の詩である。

はじめ紹興の庚辰の年(三〇年一一六〇年)、わたくし熹は(五夫盆地の)山あいでも病気で臥せっていた。朝廷に仕える親しき友人(劉珙)が書簡で招いてくだされ「胡憲先生だけが行くことになつた。わたくし熹は戯れに(ふた)つの詩を返書の代わりとして返した。その詩にいう。

(胡憲)先生は臨安の芸香閣にのぼっていかれた(原注―時に籍

溪先生は秘書省正字に任命され、館閣に赴いてお仕事につかれた)

閣老(劉珙)殿は新たに「不正取り締まりの」(た)角の冠をかぶら

れた(原注―劉共父殿は秘書丞から監察官に任命された)

(劉・胡の郷里は)隠れ潜むひとを留め置き 誰もいない谷あい
に臥せさせた

あたりの川面の風と月をそのひとが見るようにと 一章。

ぼろ家の向かいは「緑の」屏風に連なる

夕暮れになつても「その屏風に」じつと向かい合っているが

「あたりの自然は」模範となるこの山を静まりかえらせている

浮き雲はのんびりと変化するそのままに

永久の青々とした山々はただこのように青い

二章。

ある方が胡（宏）先生にお伝えして語り、胡先生はその門人の張

（栻）欽夫殿に、「わたしはこの人に面識はないが、しかしこの詩

をじっくりみると、向上する力を持つようなのがわかる。ただその

言葉には体があるが用がない。だからわたしはこの詩をつくつてこ

のことをいましめ喚起する。彼がこのことを聞いて発憤するように

と願うものである」と語られた。明年、胡先生は亡くなられた。さ

らに四年して、わたくし熹は、はじめて欽夫殿に会つて、その後こ

のことを聞くことができた。胡先生にお会いしてその細目を教えい

ただくにはとうとう及ばなかったことを残念に思う。そこでこの顛

末を述べて文字に書きつけ、胡先生の意とすることを忘れることが

ないようにするのである。

見招^③。熹戲以兩詩代書報之曰、

先生去上芸香閣^④、（原注）時籍溪先生除正字、赴館供職。

閣老新峨多角冠^⑤。（原注）劉共父自秘書丞除察官^⑥。

留取幽人臥空谷、

一川風月要人看^⑦。一章。

甕牖前頭列画屏、

晚來相對靜儀刑。

浮雲一任閑舒卷、

万古青山只麼青^⑧。二章。

或伝以語胡子、子謂其學者張欽夫曰、吾未識此人。然觀此詩、知

其庶幾能有進矣。特其言有体而無用^⑧。故吾為是詩以箴警之。庶

其聞之而有發也。明年胡子卒。又四年、熹始見欽夫^⑨、而後獲聞

之。恨不及見胡子而卒請其目也。因叙其本末、而書之于策、以無忘

胡子之意云。

胡五峰の詩に跋す

幽人偏^{ひと}へに愛す 青山の好き^よきを、

是れ青山の青くして老いざるが為めなり。

山中に雲を出して太虚に雨ふらし、

塵埃を一洗して山更に好し。

右は衡山の胡子の詩なり。初め紹興の庚辰、熹病に山間に臥す。親

しき友の朝^{あさ}に仕ふる者書を以て招かる。熹戲れに兩詩を以て書に

代へて之に報いて曰ふ、

跋胡五峰^①詩

幽人偏愛青山好、

為是青山青不老。

山中出雲雨太虚、

一洗塵埃山更好^②。

右衡山胡子詩也。初、紹興庚辰、熹臥病山間。親友仕於朝者以書

先生去き上る 芸香閣（時に籍溪先生 正字に除せられ、館に赴き職に供す）、

閑老新たに峨す 豸角の冠（劉共父 秘書丞より察官に除せらる）。

幽人を留取して空谷に臥せしめ、

一川の風月 人の看んことを要す。一章。

寢廡せういの前頭 画屏に列す、

晚来 相對して儼刑を靜む。

浮雲 一に閑かに舒卷するに任す、

万古の青山 只塵しちに青し。二章。

或ひと伝へて以て胡子に語り、子其の学ぶ者の張欽夫に謂ひて曰く、吾れ未だ此の人を識らず。然れども此の詩を觀るに、其の能く進むこと有るに庶幾きを知れり。特だ其の言 体有るも用無し。故に吾れ是の詩を為りて以て之を箴警す。其の之を聞きて発する有らんことを庶ふなり、と。明年 胡子卒す。又た四年、熹 始めて欽夫に見ひて、而る後に之を聞くを獲たり。胡子に見えて卒に其の目を請ふに及ばざるを恨む。因りて其の本末を叙して、之を策に書し、以て胡子の意を忘るる無からむと云ふ。

①胡五峰 胡宏（一一〇五—一一六二）、字は仁仲、建州崇安県籍溪里の人の号。胡安国の末子。『宋史』卷四三五、『学案』・同『補遺』卷四二「五峯学案」等。北宋末、程学を程門高弟の侯師聖に学び、併せて父胡安国の学を伝える。胡安国が衡山北麓に居を定めてからは中央政府の職にはつかず、そこで暮らす。晩年、

張栻が師事する。北宋道学を發展させた心性論や心を鍛える工夫論としての「察識端倪」説は、張栻を通して朱熹にも影響を与え、朱熹独自の思想的立場形成の跳躍台となったことで有名。道学思想エッセイ『胡氏知言』、文集『五峯集』が残る。

②幽人偏愛青山好く この詩は『五峯集』卷一に「朱元晦 詩を劉貢父に寄せ、籍溪先生を風するの意有り。詞は甚はだ妙なるも意は未だ員まどかならず。因りて三絶を作る。朱元晦寄詩劉貢父、有風籍溪先生之意。詞甚妙而意未員。因作三絶」とある三首の一つとしてみえる。ここでは、本詩後半の「山中出雲雨太虚、一洗塵埃山更好」は、「山中出雲雨乾坤、洗過一番山更好」に作り、若干異なる。幸いに本詩のもとになった朱熹の二つの詩については『朱集』卷二に「寄籍溪胡文及劉恭父二首」として収録され、第4条で大いに参考とした『絶句訳注』第二冊、七二頁以下で詳細な訳注がなされている。よって以下、本条の三つの詩についても、第3条の詩に引き続き、詩語の深いレベルの語注は略する。詩語の解析と詩としての表現の問題については、同書を参照されたい。ここでは周辺の事情を中心に一首ごとに全体的にみていく。

胡宏の本詩について言えば、第4条注①所掲、友枝龍太郎『朱子の思想形成』六三頁に、「朱子の観じた青山は万古不動の静なる青山であり、五峯の観じた青山は、雲出で雨ふり一洗されてさらに好き静動含む青山である」という言葉が参考となる。③親友仕於朝者以書見招 親友は、注④後述の胡憲、注⑤後述の劉璘のこと。招いたのは、紹興三〇年（一一六〇）八月二〇日前

後。東氏『年譜長編』巻上、二五七頁以下、参照。

- ④先生去上芸香閣 「先生」は胡憲（一〇八六一一六二）、字は原仲のこと。建州崇安原籍溪里の人。『宋史』巻四五九（隱逸伝）、『学案』・同『補遺』巻四三「劉胡諸儒学案」等。朱熹が行状を書く（『朱集』巻九七「籍溪先生胡公行状」）。朱熹の父朱松が死去する際に遺命で朱熹が師事することになった三先生のうちの一人。北宋末、憲の父が従兄弟という関係の第3条の胡安国に学び、建州教授などにもついていたが、南宋初の秦檜政権期は隠棲し、秦檜死後の紹興二九年（一一五九）に秘書省正字として召され（『繫年要録』巻一八三）、七十歳を越えるにも関わらず応じ、三〇年六月に臨安に赴いた（東氏『年譜長編』巻上、二五三頁の考証、参照）。その真意については、朱熹「行状」に述べられている。「正字」は「字を正す」、すなわち書籍の文字を校正する職。「芸香」は虫除けの香り草、「芸香閣」は宮中の蔵書室。「秘閣」「秘府」「秘館」に実質は同じ。
- ⑤閣老新峨豸角冠 「閣老」は中書舎人の雅称。劉珙（一一二二—一一七八）、字は共甫、を指す。建州崇安原五夫の人。『宋史』巻三八六、「学案」・同『補遺』巻四三「劉胡諸儒学案」等。朱熹が行状および神道碑を書く（『朱集』巻九七「観文殿学士劉公行状」、巻八八「観文殿学士劉公神道碑」）。注②の胡憲と同じく朱松遺命の朱熹の三先生の一人、劉子翬の嗣子。朱熹の少年頃よりの学友。実父は劉子翬の兄弟の劉子羽。紹興二二年（一一四二）年の進士。孝宗時代には参知政事に至る。「豸角冠」は、監察御史の冠（『後漢書』輿服志下）。劉珙は五

月丙辰に監察御史となっている（『繫年要録』巻一八五）。

- ⑥留取幽人臥空谷 「留取」する主体は「一川風月」と表現される、擬人化した村の自然。「幽人」は世を避けて山奥に住む人。『易』履。「空谷」はひと気のない谷。『詩経』小雅・白駒、『水經注』など。「一川」は、『絶句訳注』はこのあたり一帯、あたり一面、ととる（八一頁）。しかし「風月」に対して水がある方がよく、風景が「谷」ともなっているため、やはり「川」の意を残した訳語がよいか。
- ⑦甕牖前頭列画屏 「甕牖」は貧乏で粗末な家の形容。『礼記』儒行篇に「蓬戸甕牖」と。「列画屏」は『朱集』巻二は「翠作屏」に作る。「儀刑」はのり、手本、模範（とする）。『詩経』大雅・文王に「儀刑文王、万邦策孚」と。「舒卷」はのび広げることと巻くこと。「只麼」はこのようにの意。
- 第一、二句は、静坐して外の自然にひねもす対峙し、心を鍛え静めているその姿を表現する。「静儀刑」は、こちら心静まればあちら自然と一体化し内外の固定化区分が消えていく様子をいうか。第三、四句は、そうした心に映じた風光描写。わたしが見るのであるとともに、その自然のそれ自体の動き、姿からの表現でもあるという表象であろう。
- ⑧有体而無用 体と用とは、例えて言えば水と波との関係のようなもので、本体・主体と作用・現象などと訳され、さまざまな問題、課題、現象を整理し認識しようとするときに用いられる論理形式である。ここは、静坐により心を鍛え主体をつくつていく姿はあるが（有体）、このままではその主体は内向きで落ち

着いてしまい、社会的に外に向かつて働いていかない可能性がある(無用)、といった意で語られている。これに対し胡宏は、心はいつも外界と交渉し働いている中で刷新され鍛えられるということを、「青山」の風光に託す。彼にあつては、体と用、静と動は、分別はあるが常に一体のものとして捉えられる。

⑨熹始見欽夫 隆興元年(一一六四)一月のこと。『語類』卷一〇三第五〇条の発言と『建炎以来朝野雜記甲集』卷二〇「癸未甲申和戦本末」をつきあわせた東氏『年譜長編』卷上、三一、二頁の考証、参照。

【補説】 いわゆる「定論」を定立する以前に、李侗・延平先生に傾倒していた時期から、胡宏、張栻の胡氏湖南学傾倒へと朱熹思想は転換すると言われるが、本条は、ちょうどその転換を朱熹自らが後者の立場の時点から解説するという自己認識を語る有名な資料として、諸研究で用いられてきたものである。本訳注筆者には、その位置づけに沿っては、特に付け加えるべきことの準備はない。ひと言だけ言うと、朱熹自身が表象する対比の妙は、「青山」をとともにみながら、朱熹の第二首の詩とこの胡宏の詩をつきあわせることにある。しかし、朱熹から一歩距離を置いて言えば、胡宏の詩は三首ある。自戒を込めて述べるのだが、この場面の思想史研究、また狭い意味の朱子学研究ではなく胡宏に関わる南宋思想研究のさらなる深化のためには、この三首全体を分析し、またそれを胡宏の他の詩と文と総合化させて検討する作業が、求められているのではなからうか。

6 張(浚)魏公が了賢のために仏号を書いたのに跋する

世の学士・大夫は利害の泥沼に身を置き、駆けずりまわってかえりみない。そこで生き死にや困窮榮達のぎりぎりのときには(うろたえて)、隱遁の士に対し心はじめるものがある。丞相の(張)魏公が了賢長老に心動かされる理由をじっくり見るとわかるのだ。ああ、儒の衣服を着て、聖人の道を学び、誠心ひたすら義理によつて心ヲ存スル(本心を保持する)『孟子』尽心上篇)ことができて、利害に直面するときに心が揺れ動くことがないのであれば、その立った姿はいかなるものとなるであらう。

乾道丁亥(三年)冬十二月九日(新曆一一六八年一月二〇日)、新安の朱熹が書きつける。

跋張魏公(①)為了賢(②)書仏号(③)

世之学士大夫措身利害之塗、馳騫而不反。是以生死窮達之際、每有愧於山林之士。觀丞相魏公所以慨然於賢老者(④)、則可見矣。嗚呼、服儒衣服、學聖人之道、誠能一以義理存心、而無惑於利害之際、則其所立當如何哉。乾道丁亥冬十有二月九日(⑤)、新安朱熹書。

張魏公了賢の爲めに仏号を書するに跋す

世の学士大夫は身を利害の塗に措き、馳騫して反らず。是を以て生死窮達の際に、毎に山林の士に愧づる有り。丞相魏公の賢老に慨然たる所以の者を觀れば、則ち見る可し。嗚呼、儒の衣服を服し、聖人の道を学び、誠に能く一に義理を以て心を存して、利害の際に惑う無く

んば、則ち其の立つる所は当に如何なるべけんや。乾道丁亥冬十有二月九日、新安の朱熹書す。

①張魏公 張浚（一〇九七—一一六四）、字は德遠、漢州綿竹県（四川省）の人のこと。功績により「魏国公」の封号を賜わったため魏公という。紫巖先生と称せらる。『宋史』卷三六一、『学案』・同『補遺』卷四四「趙張諸儒学案」等。朱熹が行状を書いている（『朱集』卷九五「少師保信軍節度使魏国公致仕贈太保張公行状」）。政和八年（一一一八）の進士。宋金戦争の宋側の主戦派指導者の重鎮。紹興五（一一三五）年二月から同七年九月まで尚書右僕射、隆興元年（一一六三）一月から同二年四月まで尚書右僕射（『宋史』卷二三三「宰輔」四）。

②了賢 南宋初の臨済系の有名な禅僧大慧宗杲（一〇八九—一一六三）の弟子。大慧が亡くなるときに、「生もこれだけのこと、死もこれだけのこと、偈を残すのと残さぬと、どちらが熱いやら。生也只恁麼、死也只恁麼、有偈与無偈、是甚麼熱大」との偈を残したが、「偈を」と請うたのが「侍僧」の了賢であった（『五灯会元』卷一九「南岳下十五世 昭覺勤禅師法嗣 臨安府徑山宗杲大慧普覺禅師」）。注①の張浚およびその母も大慧に参禅していた（士大夫への大慧の説示と影響については、荒木見悟訳注『禅の語録17 大慧書』筑摩書房、一九六九年、参照）。紹興二五年（一一四五）の秦檜の死去後、張浚が中央政界に復帰台頭するのを恐れた秦檜後継者は、張浚を「永州（湖南）居住」にして押し込めた。大慧はこのとき見舞いの使者を送り、その使者が了賢であったらし

い。元・柳貫『待制集』卷一九「跋張魏公書心經」に、「紹興二十八年）徑山の妙喜老人、公と世外の交はりを為し、乃ち其の徒了賢をして浙より湘に入り、公の安否を問はしむ。公為めに此の経を手書す。徑山妙喜老人、与公為世外交、乃遣其徒了賢自浙入湘、問公安否。公為手書此経」とみえる。妙喜は大慧の号の一つ。その後、朱熹の本跋文執筆時の乾道丁亥（三年）には、了賢は豫章（洪州、隆興府）の上藍寺にいた。大慧と了賢の両者に親交があった周必大（一一二六—一二〇四）の回想の一節に、「隆興元年に大慧に会い、そのとき「侍者了賢」に山の下まで送らせ、大慧はまもなく亡くなった。」後ち四年、乾道丁亥の十一月に当たり、予豫章を過ぎり、賢の上藍に住するに値ひ、相与に旧を語り、甚はだ款^{まじ}ぶ。後四年、当乾道丁亥十一月、予過豫章、値賢住上藍、相与話旧、甚款」（『文忠集』卷四〇「跋妙喜遺筆」という）。

③仏号 未詳。注②のように周必大が乾道三年に朱熹より一月早く豫章に立ち寄ったときに、張浚が書いた文字を了賢からやはり見せられており、次の跋文を書いている。「丞相魏公の言は訂るに千金なり。義烈の称の二字は、師の号なり。不朽に賢れり。乾道三年十一月某日、豫章の南浦亭に観る。丞相魏公言訂千金。義烈之稱二字、師号也。賢乎不朽矣。乾道三年十一月某日、観於豫章南浦亭」（『文忠集』卷一六「跋上藍長老了賢所收張丞相帖」）。「賢乎不朽矣」は了賢と掛けているか。朱熹が言う「仏号」は、あるいはこの「義烈」か。

④所以慨然於賢老者 注②の柳貫が伝える記述のように、中央で警戒されている張浚のところに使者として赴いたことか、他に張

浚との関わりの挿話があるのか、未詳。張浚の文字を朱熹に見せた場面です賢が朱熹に語っていたであろう話の中に「慨然」という感慨を抱いた内容があるろう。

⑤乾道丁亥冬十有二月九日 本訳注第四条の注で述べたように、朱熹はこの乾道三年に長沙に住む張栻を訪問した。衡山に登りその帰途、橘州で張栻らと十一月二十三日に別れ、門人林用中、義弟范念徳らと袁州から洪州というルートを取り、十二月二十日に崇安に戻る(『朱集』巻七五「東帰乱稿序」。「十有二月九日」はこの途次に当たり、豫章の上藍寺に宿泊した。『朱集別集』巻一「与劉共甫」二の一節に、「某豫章に至り、上藍寺に宿す。某至豫章、宿上藍寺」とみえる。書簡の時期については、束氏『年譜長編』上、三八三頁、参照。朱熹はこの上藍寺で了賢が所蔵する、張浚が書いた文字文章を見た(『朱集』巻五「觀上藍賢老所蔵張魏公手帖、次王嘉叟韻」。この詩は『朱集』目録によると「東帰乱稿」に入れられたものの一部にあたる)。

【補説】 以上の注を併せ考えると、朱熹は本跋文を、張浚の真筆を了賢に見せられた場面で書いていることになる。眼前に所蔵者がいる場合、その所蔵者をよく評価する言葉が必要である。とともに、その張浚の文字を後に目にする士人にもその跋文は読まれることになり、自身の独自の見立てや思考をそこに書き込む必要もある。注③に示した周必大の跋文も、一ヶ月後のこのとき朱熹らが見せられていた可能性も高い。周の跋文の後に朱熹の跋文がつけられた可能性もある。跋文を書く場合には、

その物的形態と流通のあり方を読み込んで作る必要がある。

以上のようにみた上で、朱熹の本跋文の文脈構成をあらためて考えてみると、それは、政治的にあのように活躍した張浚殿は参禅によって心を鍛えており、了賢はそれを導いた一人である。その了賢のもとに残された張浚の文字は、両者の深い交渉のまさしく証拠である、と了賢を称えつつ、一方で、張浚が仏教をまじえるのではなく、もし純粹に儒学によって心を鍛えることができたならさらに立派になっていたのであると、心を鍛える新たな儒学という朱熹自身の道学の立場を、後にこの跋文を見る者に向けて後半で少しく提示しようとしたもの、ということになるか。